

# 生産力と生産関係とイデオロギー

—— 高島善哉『時代に挑む社会科学』の整理と展開の試み ——

長 島 誠 一

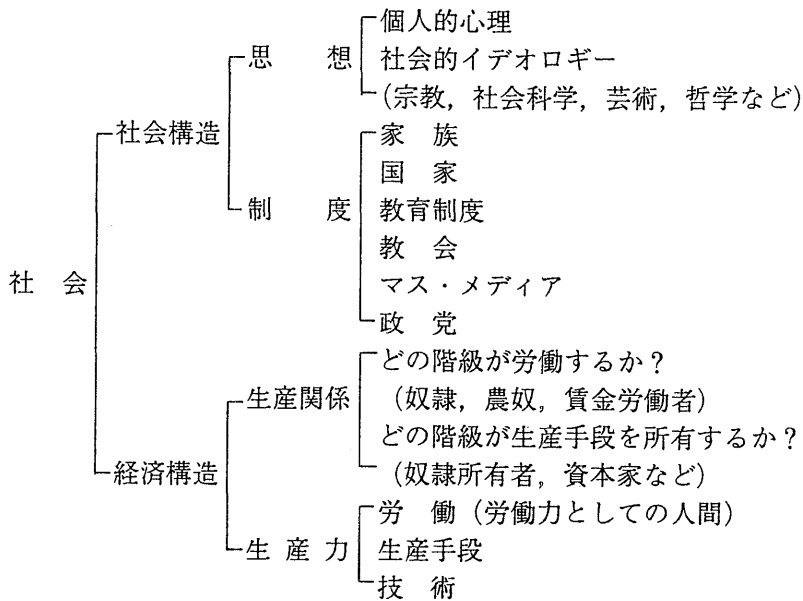
はじめに

本稿のテーマをみたなら、読者は唯物史観（史的唯物論）の公式を思い浮かべるであろう。その通りである。唯物史観による社会構成体は周知のように、第1図のように要約できる。生産力と生産関係からなる経済構造（土台）と、その上に聳える制度と思想からなる社会構造から、社会体制の原理的構造が形成されている。公式主義・教条主義的理解を排除するためには、まず経済構造が社会構造を一元的に規定するように理解してはならない（経済決定主義ないし基底還元主義）。生産力・生産関係・制度・思想すべてに人間が主体的に関わり、かつそれらに規制されているからである。この社会体制は構造連関を示しているのであり、人間を中心とした相互規制の総体関係としてまず理解すべきである。

こうした社会体制としての資本主義社会を、主体としての人間を中核として再構成しようとしたのが高島善哉の社会科学体系であり、その理論的展開が「生産力の理論」であった。本稿で検討する『時代に挑む社会科学』は高島の最後の著作であり、「生産力の理論」を集大成することを意図して作られた作品である。それと

同時にあらたにイデオロギー論が加わり、「生産力の理論」との結合が試みられているのが本書の特徴ともなっている。「時代に挑む」という意気込みの背後からは、社会学者・高島善哉の社会科学の現状に対する危機感がひしひしと伝わってくる。「社会科学というものは、現在ではあまりに多岐多様に分化し、専門化して、素人はもちろんのこと、専門家でもお互いに理解し合うことが難しくなった。その結果、社会科学は時代を見る眼を失い、社会に働きかける活力を失うようになった。社会科学は何の役にもたたないと言う非難の声が聞かれるようになった。人間不在の社会科学、現実離れをした社会科学ということから、社会科学への不信の気運が急速に高まってきた。これは、この世界に籍を置くものとしては見逃してはならない最近の風潮である」。ところが生誕したときの社会科学は、「時代に働きかけ、時代に挑み、新しい人間と社会を作り出そうとする意欲と活力を」持っていたのである。ところが、「現代の社会科学には、木を見て森を見ない恨みがあるばかりでなく、木や森をいわば植林し造成する態度がかけているように思われる。資料を集め、統計を整え、これを分析したり解釈したりすることに注意が向けられ、多くの努力が払われているけれども、それを総括したり、共通の

第1図 社会体制



(出所) Howard J. Sherman, *Foundations of Radical Political Economy*,  
M. E. Sharpe, Inc., 1987, pp. 44.

基盤にまで掘り下げたりする努力が足りないように思われる。一言で言えば、作る態度、産出する構えがかけている」。こうし現代の社会科学への危機感が、高島にイデオロギーの再論へと駆り立てたと理解してよいであろう。

しかしイデオロギー論の再登場は、この著作の論理展開を複雑化した難解なものとした恨みもある。本書を解説した渡辺雅男氏の証言によれば、「高島善哉の会」での合評会においては、「高島の問題提起とかみ合う議論はとうとう出ずまい、無理解とすれ違いの議論」であったという。無理解や黙殺は論外としても、渡辺氏も指摘しているように分かりにくいのである。「ポイントの一つとなるのは、概念の重層性という発想であろう。技術にせよ、イデオロギーにせよ、社会科学の基本的概念はさまざまな規定や内容を含み、それらが重層性をなして

一つの理論的体系を構成している。この重層性、複合性を解きほぐし、各層を秩序だて、組織化することこそ、議論の混乱を解くカギである。そう高島は考える。問題を三次元的な立体構造としてとらえているといったらわかりやすいだろう。」<sup>2)</sup>。渡辺氏が指摘するように、生産力・労働関係（生産関係ともなる）・風土・技術・社会・イデオロギーといった基本概念がそれぞれ複合性・重層性を持つものとして相互媒介的に総体的に展開しようとしているのが第1の特徴である。社会体制を生産力・労働関係（生産関係）・イデオロギーの三次元構成で複合的・重層的にとらえようとするのが第2の特徴である。まさにこうした方法論そのものが難解性をもたらしているとの印象を私も持った。それは生成途上の体系に必然的に伴うところの、論理上の不整合や未整理がみられるともいえるだろう

う。

本間要一郎氏の証言によれば、本書の改訂版を準備するための検討会において、「・・・われわれの疑問や質問にたいする先生のお答えは、大体において、その見解を改めるというよりは、自説をいっそう拡充強化するという性格のものであったが、たとえば、この本では生産力の理論とイデオロギー論が十分に整理されないまま混在していて読みづらいと、我々が意見を述べた場合など、先生はなるほどそうかと、頷かれていた。」という<sup>3)</sup>。その後高島自身や門下生の諸氏が整理し展開されているのかは、私にはわからない。しかし私なりに高島の議論を整理してみても、明示的に言及されていない領域を補充していつてみたい。私見を先に述べれば、「整理されないまま混在」しているのは「生産力の理論」やイデオロギー論だけではなく、労働関係（労働過程・労働関係・生産関係）にもみられるし、三者の三次元構成の相互関係自体が不明確性を持っていると考える。とりわけ、市民社会と資本主義社会との関連についてはその感を強く私は持っている。このような諸点を整理してみようとするのが本稿の目標である。

## 第 1 節 生産力

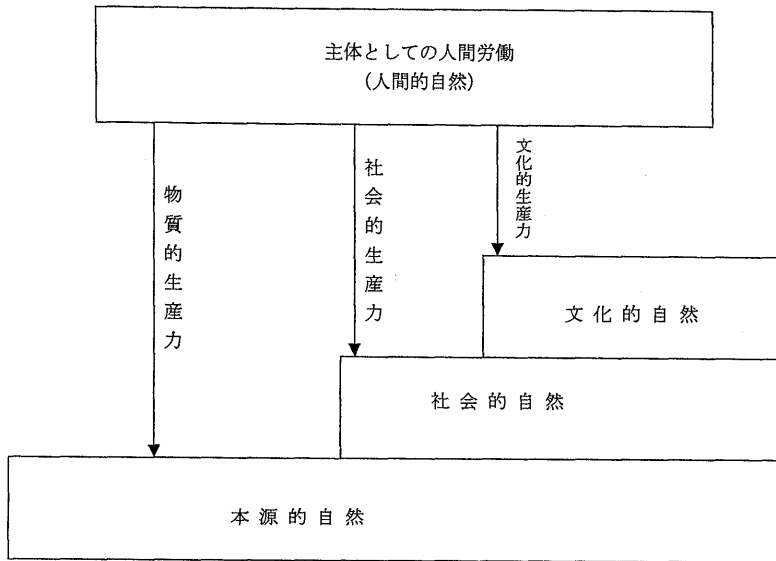
「生産力の理論」こそ高島社会科学を貫く棒のようなものである。本書では風土と技術の問題も別個に論じられている。

### 1. 生産力の構造

生産力とは人間が生産において発動する力であり、主体であるところの人間と客体であると

ころの自然（本源的な自然・人間的な自然・社会的な自然）を統一するカテゴリーである。その意味する内容は、第 1 に「主体的性格」にある。人間の側に引きつけていえば労働の主体が人間であり、労働の内容は、(1) 自然に働きかける労働、(2) 歴史と社会に働きかける労働、(3) 精神文化を創造する労働、となる（高島善哉『時代に挑む社会科学』102 頁）。第 2 の意味は、「複合的な性格」にある。労働が三つに分類されたように生産力も、物質的生産力、社会的生産力、精神的生産力に分けられ、その複合的性格が論じられている。社会的生産力とは、「人間が単に集団や組織の中で労働するだけでなく、その集団や組織そのものを労働の対象とすることによって生まれる生産力」（同上書、112 頁）であり、分業や協業がその典型である。このような社会的生産力は経済的世界だけではなく政治的世界や教育的世界においても現れる（112-114 頁）。生産力の第 3 の内容として、「重層的な性格」がある。三つの生産力なり三つの労働の構造連関の問題である。主体としての労働に対応して客体としての自然は、本源的な第 1 次的な自然、人間的な第 2 次的な自然、社会的な第 3 次自然に区分され、人間的な自然が本源的な自然と社会的な自然を媒介していることになる（120-121 頁）。人間は生きていくためになによりもまず生活物質（衣食住）の素材を自然から獲得しなければならないが、人間の労働が本源的な自然と社会的な自然とを媒介するということは、「取りも直さず自分自身を生産し、そして再生産するというところに他ならないのである。そしてこのような生産と再生産を支え、可能にしてくれるものが本来の自然であり、それを踏まえながら人間的な自然の活性化につとめる

第2図 生産力の構造連関



のが労働である」からである (121-122 頁)。これこそマルクスの労働の二重性概念の意味するものであると高島はいう。そして社会的自然とは、社会法則が客観的に貫徹する世界であり、文化的自然とは文化遺産や学派が継承される世界である (123-125 頁)。

以上の生産力の構造連関をわかりやすく図で示せば、第2図のようになるであろう。社会や文化の世界を「自然」と表現しているのは誤解を生みかねないが、高島の真意は客観的な自然法則のように貫徹する社会法則や文化的継承性が貫徹する世界という意味である。物質的生産力とは、「自然と人間との物質代謝過程」といいかえてもよい。最大の特徴は、社会や文化という上部構造を作る社会的生産力と文化的生産力を生産力に組み入れている点である。高島独自の生産力規定である。

## 2. 生産力の中核<sup>9)</sup>

前項で明らかにしたように、高島は人間的自

然を他の二つの「自然」を媒介するキー・ポイントにおいた。この人間的自然とは、「人間が物欲や権力欲や愛欲の真っ只中で生き、働き、悩み、苦しみ、同時に喜び合う、矛盾に満ちた世界である。天国でなく地上の、生地をむき出した、ありのままの人間の姿がうごめく世界」(144 頁)であり、本源的な自然と社会的自然に対して措定され両自然を媒介するものと位置づけられる (146 頁)。そして両自然を媒介するものが労働であったように、人間的自然が両自然を媒介する場が「原型としての労働過程」になる。「生産力の理論」の基礎工事を完了させるために高島は、風土論と技術論へと向かう。

## 3. 風土と技術の複合性・重層性

風土とは、「ある国土に長い間住み着いた部族なりその他の人間集団なりが知らず知らずの間に身につけてきた、ある特殊な感じ方、あり方、存在様式を言い表すものと見て誤りなからう」(158 頁・傍点は原文、以下同じ)。生産力

が重層的性格を持っていたのと同じく、風土も自然的風土・社会的風土・精神的文化的風土といった重層性を持つ。しかしその概念上の違いは、「生産力がすぐれて主体的なものであるのに対して、風土がすぐれて客体的なもの」(159-160 頁)である点にある。生産力と風土との関係は、「人間の生の営みを通して風土は形成される。人間の生の営みとは何であろうか。それは、もっとも基本的には人間による人間の生産であり、それと連動して衣食住の資料の生産である。さらに、国づくりのための営み、人づくりのための営みから、様々の風土的な色合いをもった精神的、文化的な生産にまで及ぶ」(168 頁)であろう。いいかえれば、「風土はそこにすむ人々の集団によって作り出され、生産されたものだと言わなくてはならない。とりわけ人々の経済的、政治的、教育的生産において作り出されたものだと言わなくてはならないのである。」(169 頁)。そして高島は、自然主義と人間主義の統一こそ現代風土論の新たな出発点であると問題提起している(176 頁)。

技術も複合性・重層性をもっているとして、高島は技術論論争を整理する。その暫定的な結論は、「体系説」と「適用説」の統一方向であり、「技術の本質を生産力の場において考えるという技術観が志向するのは、まさにこのような統一に他ならないのである。これによると、技術とは生産力の主体と客体とをとり結ぶ媒介方式だということになる」(193 頁)。また、技術は中立的かイデオロギー的かという論争も、両方の性格を持たざるをえないとする(202 頁)。

## 第 2 節 生産関係

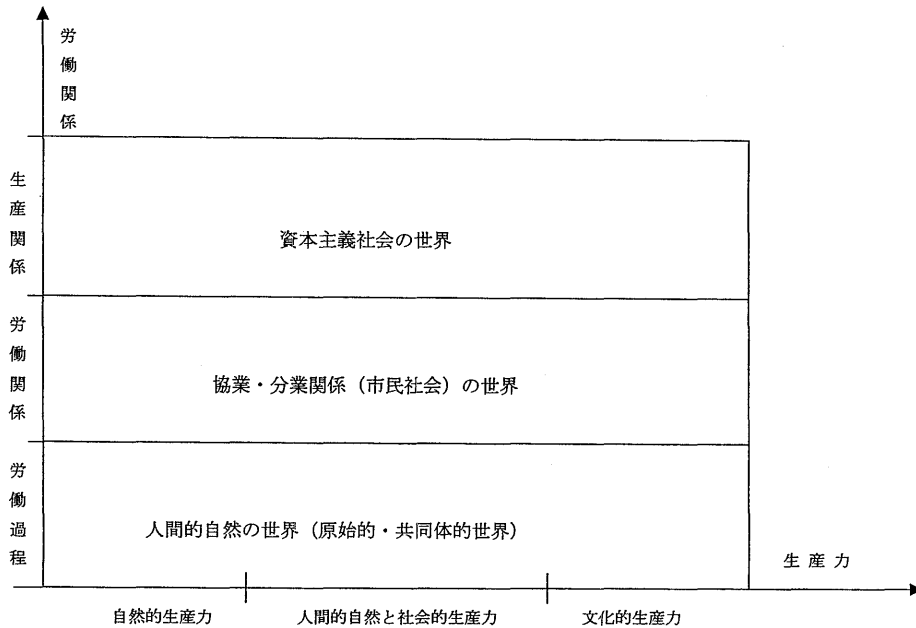
高島の論理は「螺旋型積み上げ方式」として展開されている。生産力の次元が第 1 次元とすれば、労働過程・労働関係・生産関係へと展開される次元はいわば第 2 次元<sup>5)</sup>といえよう。

### 1. 労働過程・労働関係・生産(所有)関係

労働過程は多種多様であるが、その原型としては、主体としての人間が直接に自然に対して働きかけている場面(物質的生産力の次元)である。高島は例として南海の孤島に漂流したロビンソン・クルーソーの労働を取り上げる。労働関係とは、「労働過程において立ち働く人と人との関係、二人もしくはそれ以上の複数の主体との関係」(226 頁)であり、要素としての労働関係が集合したようなものである(228 頁)。スミスやマルクスの協業や分業の世界であり、工場内部に限定されたものではない。それは工場間・産業間・社会内部・国家間にも成立している広い意味を持っている。

労働関係において不平等を生み出す要因は、第 1 に、「人間相互の間に芽生えてくる複雑で微妙な軋轢、摩擦、反目といった種類のもの」であり、第 2 に、「主体の労働能力の格差が生じること」であり、第 3 に、「指揮監督するものと指揮監督されるものとの間の専門化・職業化・不平等化・支配と従属」であるが、決定的に重要な要因は所有・非所有の関係である(240-242 頁)。まさに人間不平等の起源は土地所有とそして生産手段の私的所有に始まる。この生産関係は、生産力から眺め展開された生産関係である。高島は力説する、「生産関係は生

第3図 生産力と労働関係



産力のもっとも現実的な、歴史的社会的にもっとも具体的な存在様式として現れる」(252頁)。

## 2. 生産力と生産関係

前項で、生産関係が労働過程そして労働関係としての生産力の展開過程から導き出されたことをみた。いよいよ高島は、生産力と生産関係の「均衡・矛盾・展開」を論じる。まず、生産力を物質的生产力・生産性とする理解、経済決定主義(経済史観)、技術史観、が批判され、どの説も「客体の論理があるだけで主体-客体の論理がない、ただの客観主義的なものの見方である」(249頁)と断定される。また内容(生産力)・形式(生産関係)とみる「一種の有機体思想」も、生産力から「積み上げ方式」によって把握された生産関係を形式とするものであり拒否される(251頁)。さらに、労働関係

は生産力と生産関係の両面性を持つという説明も拒否される(254頁)。そして、生産関係主義は「生きた人間を置き忘れ」、生産力主義は「生産力が生産関係として具体化されると言う生産力理論の基礎的な視点を忘却し」としていると両面批判がされる(256頁)。

生産力の構造としての自然的生産力・社会的生産力・文化的生産力(横軸・第1次元)、労働過程・労働関係・生産関係(縦軸・第2次元)を組み合わせると第3図のようになる。第2図における「主体としての人間労働」が縦軸に分化して展開され、第3節で考察するイデオロギー論との関係で横軸に「人間的自然」を組み込んで表現している。横軸を〈生産力〉、縦軸を〈労働関係〉と呼んでおこう。3掛ける4の合計12のブロックが形成されるが、それぞれ固有の人間の活動領域があることを示唆している。さしあたり本項では、労働過程の次元が

「人間的自然（原始的・共同体的）世界」、労働関係の次元が「分業と協業関係（市民社会）の世界」、生産関係の次元が「資本制社会の世界」としておこう。

### 第3節 イデオロギー

本書を難解にしていたのは、冒頭に指摘したように、「生産力の理論」と同時的にイデオロギー論が展開されていたからである。本節ではイデオロギーに関する言及を取り出して整理してみよう。

#### 1. イデオロギーの形成過程

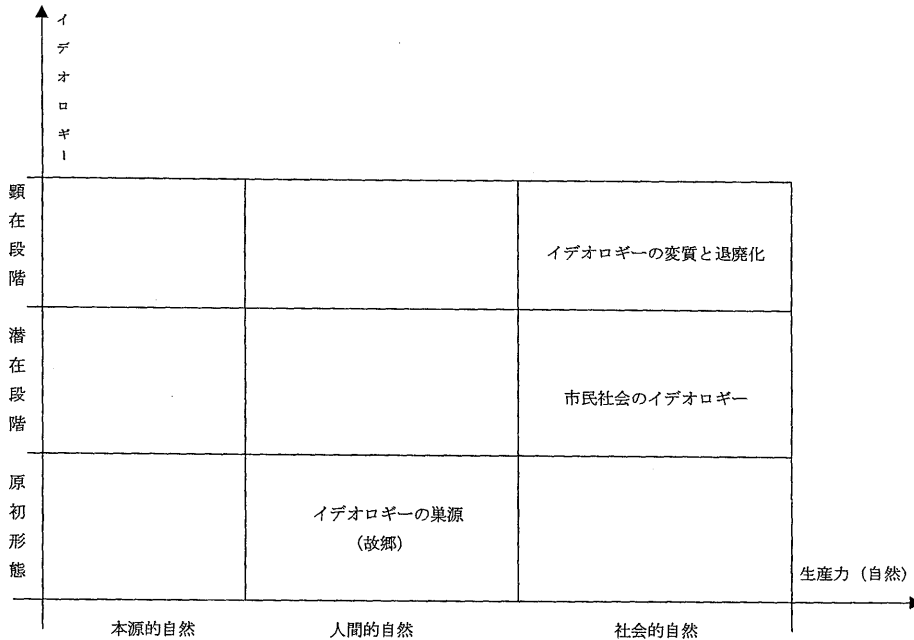
観念の学（形態）としてのイデオロギーの故郷（巢源）を高島は「人間的自然」に見いだす。イデオロギーは、現実生きようとしている人間の生活関心から生まれ、利害関心や認識関心へと発展していく（154頁）。イデオロギーの発生過程をたどると、その原初形態は労働過程において成立し、そこではイデオロギーは無色透明であり、中立的であり、一見そのまま真実であるように見える（234-236頁）。労働関係に進むとイデオロギーは、「立場の違い、利害関心の違いを基盤として生まれてくるものであるけれども、その立場の違いや利害関心の違いがまだ自覚されていない段階と見るべき」であるという（イデオロギーの潜在的段階）（237頁）。生産関係の世界に進むとイデオロギーは顕在的段階に成熟し（237-238頁）、またイデオロギーの退化や真実性の喪失が始まる（虚偽の意識としてのイデオロギー）。

#### 2. イデオロギーと生産力・労働関係

以上のように、イデオロギーの形成過程は、原初形態、潜在的段階、顕在的段階へと展開されている。また高島はいろいろな側面や次元においてイデオロギーを論じている。すなわち、イデオロギーの出発点を人間的自然の二つの契機（自然的で本能的な情動と歴史的社会的な営みを続ける生きた主体）に求めている（65頁）。また、政治と経済と教育からなる泥まみれの人間世界が現代イデオロギー論の原点だとも言っている（75頁）。イデオロギーの巢源（故郷）は人間的自然だとも言った。イデオロギー論を全面的に展開している「イデオロギーは生きている」（第3部第5章）において、まず、イデオロギーは大昔から存在したが、イデオロギー論は市民社会の産物であるという（281頁）。そこにおいて市民階級としてのイデオロギーが誕生した（301頁）。そして市民階級が資本家階級と労働者階級とに分裂することによって、市民社会のイデオロギーも分裂と対立を迎えるようになり、イデオロギーの変質と退廃が始まった（302-303頁）。

複雑多岐にわたって論じられているイデオロギー論を整理すると次のようになるであろう。生産力（その客体としての「自然」）とイデオロギーを関係づけると（第4図）、イデオロギーの巢源（故郷）は人間的自然とイデオロギーの原初形態が交差する世界に、市民社会のイデオロギーは社会的自然とイデオロギーの潜在的段階の交差する世界、資本主義社会のイデオロギー（イデオロギーの変質と退廃）は社会的自然がイデオロギーの顕在段階と交差する世界、と位置づけられるだろう。労働関係とイデオロギーを関係づけると（第5図）、イデオロ

第4図 生産力とイデオロギー



ギーの巢源（故郷）は労働過程とイデオロギーの原初形態が交差する世界に、利害関心や利害認識が労働関係とイデオロギーの潜在段階の交差する世界、虚偽の意識が生産関係とイデオロギーの顕在段階が交差する世界、にそれぞれ位置づけておこう。このように試みてみると、空白の升目があまりにも多いことに気がつく。イデオロギー論の出発点にたっていることを自覚せざるを得ない。この点は後で、空白の升目を埋める仮説作業を試みることにする。

#### 第4節 生産力・生産関係・イデオロギーの立体的=螺旋的構造

##### 1. 生産力と労働関係、穴埋め作業

生産力を労働関係によって分類すると第3図のようになった。これは高島の基本的構想であるが、空白の升目を埋めて、せっかくの「生産

力の理論」が含蓄しているであろう体系を私なりに構想してみたい（第6図）。自然的生産力は、①労働過程では「自然と人間との物質代謝過程」となり、②労働関係では「直接的生産過程における分業と協業」（工場内分業）となり、③生産関係においては「価値増殖過程」（剰余価値生産）となる。人間的自然の世界は、④労働過程では「個体の生産・再生産」の領域となり、ジェンダーの基礎的問題もこの世界に属し、⑤労働関係では「社会的個体」が登場し、「自由・平等・連帯」の世界が展開されるだろう。⑥生産関係においては資本主義的な「搾取と被搾取、差別と被差別、支配と従属」関係が支配し、人間が疎外される。社会的生産力は、⑦労働過程においては「家族」となり、人間の生産・再生産が営まれる。⑧労働関係においては、経済・政治・教育・軍事などの「社会的分業」（市民社会）が形成され、⑨生産関係においては、



第 5 図 労働関係とイデオロギー

顕 在 段 階  潜 在 段 階  原 初 形 態			虚偽の意識
		利害認識	
	イデオロギーの巢源 (故郷)		
	労働過程	労働関係	生産関係

第 6 図 生産力と労働関係 (補充)

生 産 関 係  労 働 関 係  労 働 過 程	③ 価値増殖過程 (剰余価値生産)	⑥ 疎外された人間 〔搾取と被搾取〕 〔差別と被差別〕 支配と従属	⑨ 資本制市民社会 〔資本に包摂された〕 〔市民社会〕 国家の二重性	⑫ 階級のイデオロギー
	② 直接的生産過程に おける協業と分業	⑤ 社会的個体の再生産 (自由・平等・連帯)	⑧ 社会的分業 (市民社会) 経済・政治・教育の世界	⑪ 科学・技術研究
	① 自然と人間の 物質代謝過程	④ 個体の生産・再生産 ジェンダーの基礎	⑦ 家族の再生産	⑩ 文化・芸術・文学・哲学・ 宗教などの活動
	自然的生産力	人間的な自然	社会的生産力	文化的生産力

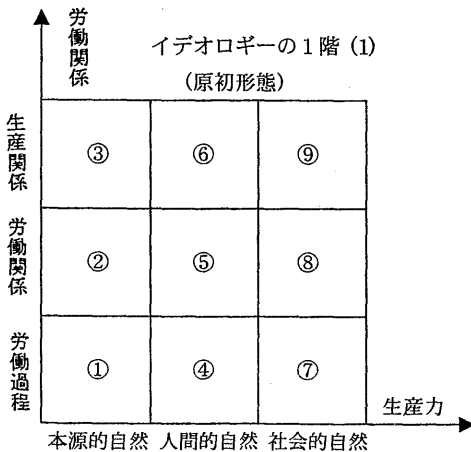
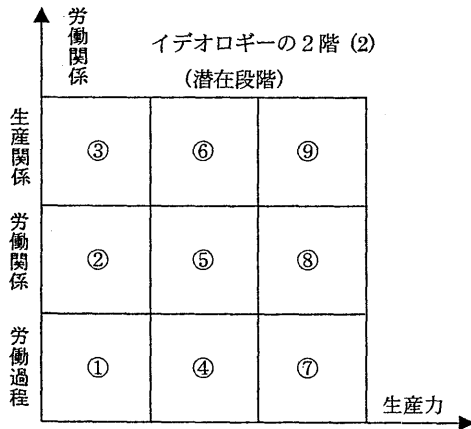
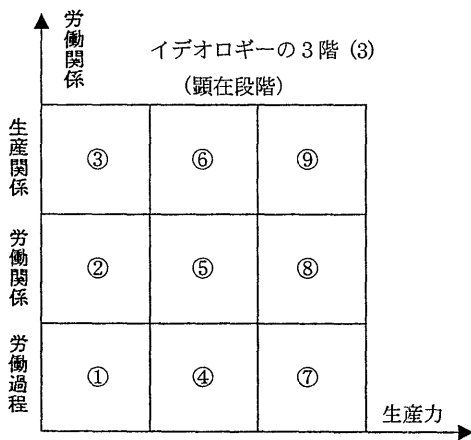
第7図 生産力とイデオロギー

イ デ オ ロ ギ ー	顕 在 段 階	③ 自然法則の意識的応用 自然破壊 自然との共生意識	⑥ 物象化 物神性	⑨ イデオロギーの変質と退廃化	生 産 力 （ 自 然 ）
	潜 在 段 階	② 自然主義	⑤ 人間主義〔啓蒙主義〕	⑧ 市民社会のイデオロギー	
	原 初 形 態	① 自然崇拜	④ イデオロギーの巢源〔故郷〕 人間の欲求	⑦ 原始的社会の中に 生きる生身の人間の情感	
		本源的自然	人間的な自然	社会的自然	

第8図 労働関係とイデオロギー（補充）

イ デ オ ロ ギ ー	顕 在 段 階	③ 生産力の統御 自然破壊 家族・文化の資本主義化	⑥ 労働の疎外意識	⑨ 虚偽の意識	労 働 関 係
	潜 在 段 階	② 産業社会（生産力）の建設 社会保存の欲求（利他愛）	⑤ 利害認識 自由な批判精神	⑧ 自由・平等・連帯	
	原 初 形 態	① イデオロギーの巢源（故郷） 自己保存の欲求（利己愛）	④ 労働関係における利害関心	⑦ 物神崇拜	
		労働過程	労働関係	生産関係	

第9図 生産力・生産関係・イデオロギーの立体的=螺旋的構造



市民社会は資本に包摂され（資本制市民社会）、市民国家は階級国家と共同管理国家の二重性を持つようになる。文化的生産力は、⑩労働過程では、個々人による文化・芸術・文芸・哲学・宗教活動となり、⑪労働関係においては、分業に基づく協業関係として営まれる科学技術研究などが属するだろう。⑫最後の生産関係は、「階級のイデオロギー」が展開される。第3図に戻れば、高島のいう「人間的な自然の世界」（原始的・共同体的世界）は①④⑦⑩、「協業・分業関係（市民社会）」は②⑤⑧⑪、「資本主義社会の世界」は③⑥⑨⑫の領域から構成されることになる。

## 2. 生産力とイデオロギー、穴埋め作業

第4図における空白の升目を埋めていこう（第7図）。本源的自然（自然的生産力）は、①イデオロギーの原初形態としては自然崇拜となり、②潜在段階では啓蒙思想期の自然主義思想となり、③顕在段階では自然法則の意識的応用となるが、それが誤って応用されると自然破壊や人間破壊をもたらす。人間的な自然は、④原初形態では高島は「イデオロギーの巢源（故郷）」とよんだが、生身の人間の欲求の世界といいかえてもよいだろう。⑤潜在段階では啓蒙思想期の人間主義となるだろうし、⑥顕在段階においては物象化に基づく物神性が支配的となる。社会的な自然（社会的・文化的生産力）では、⑦原初形態としては「何らかの原始的な社会に生きる生身の人間の情感」であり、⑧潜在的段階においては「市民社会のイデオロギー」として総括され、⑨顕在段階においては「階級イデオロギーの形成と、イデオロギーの変質と退廃化」が進む。

### 3. 労働関係とイデオロギー、穴埋め作業

第5図は高島の螺旋的＝立体的展開が図示されているが、空白部分をあえて埋めていってみよう(第8図)。労働過程においては、①イデオロギーの原初形態は「イデオロギーの巢源(故郷)」であったが、自己保存の欲求(利己愛)が支配し、②潜在的段階では社会を保存しようとする欲求となり、自他愛の世界となり、産業社会(生産力)を建設する市民階級の思想となり、③顕在的段階においては、生産力の意識的統御の思想となるだろう。家族・文化の資本主義化も生じる。労働関係は、④原初形態としては労働関係における利害関心、⑤潜在的段階では「自由な批判精神」が支配的となり、利害関心は利害の認識へと駆り立てる。⑥顕在的段階では「労働の疎外」概念が確立するだろう。生産関係は、⑦原初形態としては、商品・貨幣・資本に対する物神崇拜が起こり、⑧潜在的段階では、自由・平等・連帯の思想となり、⑨顕在的段階では支配的イデオロギーに対する「虚偽の意識」が形成される。

### 4. 生産力・生産関係(労働関係)・イデオロギーの立体的＝螺旋的構造

さて、生産力(自然)と労働関係との構造的関連を示す第6図を土台として、生産力(自然)・労働関係とイデオロギーの関連を示す第7図と第8図とを立体的に表現すれば、第9図のようになる。当然、イデオロギーの発展段階は生産力と労働関係から二重に規定されることになる。またイデオロギーとの対応を整合的にするために、社会的生産力と文化的生産力とを社会的自然として一つにまとめた。イデオロギー

の第1階にあたる原初形態から再規定しよう。まず本源的自然(自然的生産力)におけるイデオロギーの原初形態を考察しよう。第9図(1)で①と表現されているブロックは自然的生産力と労働過程がとるイデオロギーの原初形態である(以下、1-①と表現する)。ここは「自然と人間との物神代謝過程」であり、労働過程としてはイデオロギーの巢源であり、自己保存の欲求(自己愛)が支配し、本源的自然としては自然崇拜が起こる。1-②は、直接的生産過程における協業と分業の世界であり、労働関係としては利害関心が発生する世界である。1-③は、価値増殖過程であり、本源的自然の中では自然崇拜が支配し、生産関係の中では人々は商品・貨幣・資本を物神崇拜する。

つぎに人間的自然に移ろう。1-④では、人間的自然における労働過程は個体を生産・再生産したジェンダーの基礎的世界でもあるが、人間的自然としては「イデオロギーの巢源(故郷)」であり人間の欲求が渦巻き、また労働過程としては自己保存の欲求(利己愛)の世界である。1-⑤では、人間的自然の労働関係は「自由・平等・連帯」の社会的個体の世界であるが、イデオロギーの原初形態としては、人間の欲求や利害関心が渦巻くイデオロギーの巢源となる。1-⑥は、人間的自然の生産関係であり市民社会は資本に包摂され人間が疎外されているが、社会の原始的次元では生身の人間の情感がうごめいており、資本主義社会(生産関係)の中では物神崇拜にとらわれている。

1-⑦は、社会的生産力と文化的生産力(社会的自然)における労働過程であり、家族として人間が生産・再生産・教育され、個々人の文化・芸術・文学・哲学活動が展開される。ここ

でのイデオロギーは原初形態として、「原始的社会の中で生きる生身の人間」の情感であり、「イデオロギーの巢源（故郷）」でもあり自己愛が支配する。1-⑧は、社会的・文化的生産力における労働関係であり、市民社会の中で科学技術研究が自由に行われている。イデオロギーの原初形態としては、「原始的社会の中で生きる生身の人間」の情感の世界であるが、労働関係への利害関心が渦巻いている。1-⑨は、社会的・文化的生産力における生産関係であり、資本制市民社会であり階級イデオロギーが闘い合うが、イデオロギーは物神崇拜にとらわれた原初形態にとどまる。

イデオロギーの二階（イデオロギーの潜在的段階）に移ろう。2-①は、土台は自然的生産力（本源的な自然）であり労働過程である（その内容は一階を説明したところで述べているので省略する、以下同じ）。イデオロギーの潜在的段階は自然主義思想であり、市民階級が産業社会（生産力）を建設しようとする思想であり、社会を保存しようとする欲求（利他愛）が支配する。2-②は、自然的生産力の労働関係である。イデオロギーの潜在的段階は自然主義であるが、人々は労働関係の中の利害関心を利害認識に高め、自由に批判し認識しようとする。2-③は、自然的生産力の生産関係であり、自然力を意識的に応用・統御しようとするが、同時に自然破壊を促進する。

2-④は、人間的な自然における労働過程である。労働過程からは「産業社会」思想が生まれるが、自然主義から人間主義に変わる。2-⑤は、人間的な自然の労働関係であり、人間主義に基づいた社会の中の利害認識へ向かう。2-⑥は、人間的な自然における生産関係であり、潜在

的イデオロギーとしては自由・平等・連帯となる。

2-⑦は、社会的・文化的生産力（社会的な自然）における労働過程であり、労働過程では「産業社会の建設」思想が支配するが、社会的な自然（社会的・文化的生産力）からは市民社会のイデオロギーが誕生する。2-⑧は、社会的・文化的生産力における労働関係であり、市民社会のイデオロギーの中に利害認識が生まれてくる。2-⑨は、社会的な自然における生産関係が現れるが、イデオロギーの潜在段階においては自由・平等・連帯としての市民社会イデオロギーが支配する。

いよいよイデオロギーの三階（顕在的段階）に辿り着いた。3-①は、自然的生産力（本源的な自然）の労働過程である。自然法則を意識的に生産に応用しようとするが、資本の価値増殖運動によって自然破壊が進展する。そこから生産力や自然の意識的・計画的統御の意識も生まれる。また、家族や文化の資本主義化がおこる。3-②は、自然的生産力における労働関係であるが、労働過程における科学の意識的応用や科学的・計画的な自然統御の意識とともに、労働関係における「労働の疎外」が意識されるようになる。3-③は、自然的生産力における生産関係であり、自然の意識的統御と自然保護の思想とともに、労働の生産力が「資本の生産力」として転倒して虚偽的に現象することが暴露される。

3-④は、人間的な自然における労働過程であり、労働過程における科学の意識的応用や科学的・計画的な自然統御や自然保護の意識とともに、人間関係は物象化され、商品・貨幣・資本の物神性が支配する。3-⑤は、人間的な自然の労働

関係であり、労働関係は疎外された労働として、人間的自然としては物象化され物神性化されたものとしてイデオロギーが顕在化する。

3-⑥は、人間的自然における生産関係であり、人間的自然として物象化され物神性化され、生産関係からは資本の世界の「虚偽性」の意識が誕生する。

3-⑦は、社会的・文化的生産（社会的自然）における労働過程であるが、労働過程としては、家族の資本主義経済化や文化・芸術・文学・哲学・宗教などの精神活動の階級性が登場してくる。社会的自然においては階級イデオロギーの形成と、イデオロギーの変質と退廃化が起こる。3-⑧は、社会的・文化的生産力における労働関係であるが、労働の疎外意識の誕生とともに、イデオロギーの変質と退廃化が進展する。3-⑨は、社会的・文化的生産力における生産関係であるが、イデオロギーの変質・退廃とともに虚偽の意識や体制批判のイデオロギーが誕生する。

以上のように生産力と生産関係（労働関係）とイデオロギーを立体的に三次元構成において連関づければ、合計27のブロックないし領域から構成されることになる。こうした複雑な怪物の個々の細胞（ブロック）を探求するとともに、その全体像を主体としての人間を中心として解明する課題がここに提示されたのではないだろうか。

おわりに——あらためて市民社会と資本主義社会との関係を問う

本稿の「はじめに」において述べておいたように、市民社会と資本主義社会との関連につい

て私は、高島善哉のさまざまな角度からの説明にも関わらず、理解がすっきりいかないものを感じている。本稿の最後にこの点を考察しておこう。高島の議論に戻るのは、じつは、市民社会と資本主義との関連は現代の日本社会をどう認識しかつ変革していくのかという視点に立ったときに、避けては通れない問題を提起しているからにほかならない。いいかえれば、日本国憲法をどう生かしていくかという問題でもある。高島も指摘しているように<sup>9)</sup>、憲法の理念は市民社会の原理と基本的に一致しているのであり、憲法原理の徹底化によってこそ「新しき社会」への展望が開けるものと考えている<sup>7)</sup>。

高島は、いろいろな次元で多角的に市民社会と資本主義社会の関連について説明している<sup>8)</sup>。そのためにいわゆる高島門下生の中でも、高島・市民社会像（市民制社会像）についてさまざまな解釈がなされれているように思える<sup>9)</sup>。それらをまとめると（注9を参照）、「理想像としての市民社会」・「社会主義の基礎としての市民社会」説、「理念的社會像としての市民社会」説、「方法概念としての市民社会」説、「生産力視点による市民社会」説、「生産力の構造連関としての市民社会」説、などになる。高島はいろいろな角度から市民社会論を展開しているのだから、解釈の正誤を問題にすることは意味がないだろう。それぞれの解釈がそれなりの正当性を持っているといっておこう。しいて第9図で明らかにした生産力・労働関係・イデオロギーの立体的=螺旋的構造との関連でそれぞれの解釈を分類することが許されるならば、「理想像としての市民社会」説や「理念的社會像としての市民社会」説はイデオロギーの面からの市民社会規定であり、「生産力の構造連関

としての市民社会」説や「生産力視点による市民社会」説は生産力と労働関係（生産関係）という土台（基礎）の面からの市民社会規定といえる。「方法概念としての市民社会」説は、社会的自然と労働関係とが交差する科学研究の世界における方法論からの市民社会規定といえようか。あえていえば、市民社会と資本主義社会と社会主義社会（ないし高島のいう市民制社会）の関連は生産力・労働関係（生産関係）・イデオロギーの立体構造の中で総合的に解明されなければならない。日本社会の現実を考える場合には、資本主義社会の中に疎外化・形骸化しながら生きつづけている市民社会と考える「生産力の構造連関としての市民社会」説や「生産力視点による市民社会」説が最も有効であろう。

注

- 1) 高島善哉『時代に挑む社会科学』（著作集第9巻）こぶし書房，1998年，まえがき11-13頁。
- 2) 同上書，384-385頁。
- 3) (本間要一郎「解説・価値論の復位について」山田秀雄編『高島善哉 市民社会論の構想』新評論，1991年12月，247-248頁)
- 4) この用語は高島のものではなく、私の命名である。生産力を扱っている「思想から科学へ架ける橋」（高島『時代に挑む社会科学』第2部第2章）においては、思想と科学、イデオロギー論と「生産力に理論」の説明が「混在」しているが、本項では生産力の面に限定して取り上げるのでこうした表題にした。
- 5) 高島自身は労働過程・労働関係を生産関係と区別しているが、本稿では生産力に対応する次元として一括して生産関係次元として扱う。
- 6) 「新憲法は市民制社会の理念を見事に打ち出しているものと言える」（高島『時代に挑む社会科学』277頁。）

- 7) 私の構想する社会主義像については、拙著『戦後の日本資本主義』桜井書店，2001年，の第10章第4節，参照。
- 8) たとえば、「資本主義社会は市民社会をその内的必然的な契機として内に孕んでいる」（高島善哉『現代国家論の原点』著作集第8巻，こぶし書房，1998年，254頁），「資本は市民関係を踏まえ，それを利用し，それを再生産することによって自己自身を再生産する。そしてこのことにより資本は，市民社会の実質的な合理性を形骸化し，形式的な合理性に転化していく」（同上書，250頁）。この観点からすれば，市民社会は資本主義社会の中で日々再生産されていることになる（市民社会の合理性は形骸化し形式化されるが）。私自身はこの考えに賛成である。すなわち市民社会は資本主義社会の中に生きているのである。しかし別のところでは，「日本の近代化にとって役に立つ市民社会の理念像を作り上げようとするのが著者のねらいである」（高島『時代に挑む社会科学』266頁）ともいう。ここでは市民社会論は方法論としての概念装置の意味に使われている。
- 9) シンポジウム「高島善哉—その学問的世界」（1999年5月29日）における各報告者の発言順にみてみよう。水田洋氏は，「ぼくは先生に，このことばをどこからとってきたんですかときいたことがあります。『大塚さんからだね』というのが回答でした。・・・先生はそれに，スミスからとった内容をいれ，そういう市民社会概念をさらに仕上げたのが内田義彦さんでしょう。／・・・どちらの市民概念にも，生身の市民，市民運動をする市民はいないのです。／・・・1930年代の日本の知識人のおおくをひきつけたマルクス主義は，高島・内田市民社会論が表現したような市民社会の全面開花のうえに築かれる社会主義社会を待望するものであった」（『高島善哉 その学問的世界』こぶし書房，2000年，20-22頁）。水田氏の解釈は，「理想像としての市民社会」・「社会主義の基礎としての市民社会」説といえよう。和田重司氏は，「した

がって高島先生の市民社会は *societas civilis* 以来の西欧社会思想を取りまとめたものというよりは、その発想の仕方が少し違うように思われます。それは日本の現状批判のための反対用語、さらには日本の社会を主体的に作り上げて行くための理念的な社会像として独自の性格を持たされているのではないかと思われます。」(同上書、67頁)。和田氏の解釈は、「理念的社会像としての市民社会」説といえよう。平子友長氏は、「高島にとって市民社会とは、何よりもまず現象学的問題構成を受容しつつ、その限界を『歴史へのより徹底した内在』によって乗り越えるために構想された方法概念であった。それは、研究者の方法態度を歴史対象とともに表現する概念であり、誤解を恐れずに言えば、一つの現象学的な方法概念なのである」(同上書、140頁)。平子氏の解釈は、「方法概念としての市民社会」説といえよう。渡辺雅男氏は、「・・・高島は市民(制)社会と資本主義社会とを理論的かつ概念的に区別している。『市民(制)社会』は近代社会を市民の立場、あるいは生産力の観点から見たときに掘み出された概念であり、『資本主義社会』とは同じ近代社会を階級の立場、あるいは生産関係の観点から見たときに掘み出された概念である」(高島『時代に挑む社会科学』398-399頁)。渡辺氏の解釈は、近代社会の二重性論であり、「生産力視点による市民社会」説と表現しておこう。本間要一郎氏は、「資本主義的生産関係は、歴史的に

みて、生産力がある程度の高さに達した段階で形成されるのであるが、構造的にみて、それはまた一定の生産諸力の体系を基礎として成り立っている。この生産諸力の構造連関が資本主義社会の内実であって、この次元でとらえた資本主義社会がすなわち、市民社会である。先生の愛好するいい方でいえば、これが資本主義の「原点」(「原像」)であり、この原点から出発することが、資本主義社会を真の意味において「全体的に」把握することを可能にするというのである。念のために言うておけば、市民社会が歴史的に変化して資本主義社会になるというのではなく、両者は共時的構造連関において重なり合っているのである。」(本間要一郎「解説・価値論の復位」山田秀雄編『高島善哉 市民社会論の構想』新評論、1991年、243頁)。『資本論』において、生産力=使用価値視点の諸範疇は生産関係=価値視点の諸範疇と不可分の関係において実存しうが、高島は前者の諸範疇を後者の諸範疇からひとまず切り離し、その構造連関(=体系)から出発して後者の諸範疇を理論的に展開できると考える。いや、「そうすることによってはじめて、市民社会の体制が資本主義的生産関係という形をとって現実のものとなる必然性が論証される」と高島は考えるという(同上書、244-245頁)。本間氏の解釈は、「生産力の構造連関としての市民社会」説といえよう。渡辺氏の「生産力視点による市民社会」説も本間氏の解釈に近いといえる。